七夕まつり

特
38

027358-000-1

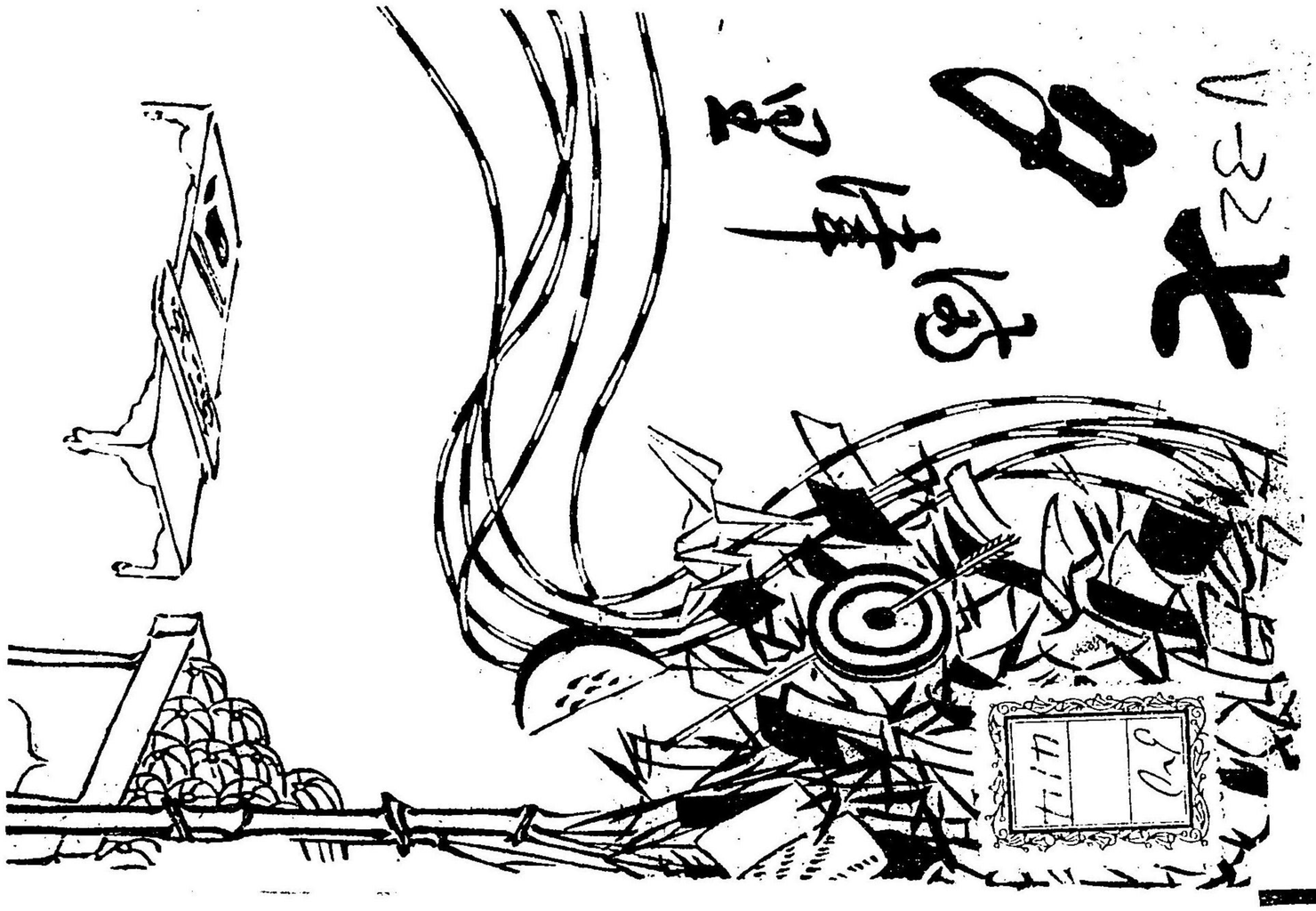
特53-383

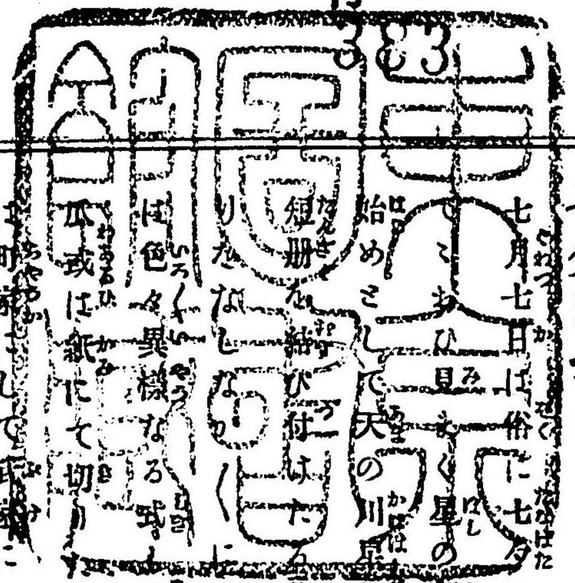
七夕まつり

村木 経策／編

M27

ADJ-0114





七夕まつり

七月七日は俗に七夕と稱して古來家毎に「一年の中に隔てゝ逢ひ見まく星の契りや思ひつきせぬ」といへる歌を始めとして天の川原祭の和歌詩句などを認めたる色紙短冊を結び付けはたる葉竹を樹てゝ之れに思ひ〳〵の飾りをなしなほ眼はし今は大方廢たりたれども昔は色々異樣なる或は許多あり紙張の硯墨筆算盤帳面西瓜或は紙にて切りたる網や紅白の吹流などを飾りたるは町家にして武家にては五色の絲を卷きたる環亭を机上に供へ其四方に竹を立てゝ其竹に五色の總模樣の綺

麗なる小袖を幾重ともなく懸け家によりては新しき盥に水を汲み置きて牽牛織女と云へる此夜銀河を渡る二つの星を寫し見る所もあり椽先には蜜を据ゑ中央に菓子を堆高く盛り左右に瓜桃のたぐひを山の如く盛り梶の葉を竝べ供ふるを例とす今並々の家にては思ひ當らざる所もあれど聊か古式を參照せしめんが爲めに江家次第を抄錄すべし『同書卷之八、七月七日の條に云兼日行事の藏人廻文を成さ令雜役雜色以下を催令當日掃部寮葉薦を清涼殿の東庭に鋪(當二南第三ノ間一)其上に長筵を鋪(東西ノ妻)內藏寮の官雜器奠物を持て仙華門の外に候す雜

色以下傳へ取て之を供す朱漆の高机四脚を筵の上に立つ(東西ノ妻二脚在レ北二脚在レ南相並立之)其東南の机南の妻に菓子等を居ゆ「一坏(梨東第一)一坏(桃)一坏(大角豆)一坏(大豆)一坏(熟瓜)一坏(茄子)一坏(薄鮑)或る説に干鯛一坏を加ふ然れども違式歟(或は謂る藏人の式也)北の妻に酒坏一口を居ゆ以上並に尾張青瓷朱漆の華盤あり西南机同上西北の机に香爐一口を居ゆ(在レ西納殿百和香四兩之を盛る)朱彩の華盤一口を居ゆ(在レ東盛二神宗華莊房△△十房五房歟)楸の葉一枚を置く(挿金針七ッ銀七件針別有二七孔一以二五色ノ絲一差合して貫レ之裏書曰七孔針莉林之歳時記七月七日牽

牛織女會天河此則其事家々婦結絲中以乞巧有喜子羅於瓜果上則以爲得巧前例件の針金銀各一色紙一枚に差す而れとも近代各七之を怪む可し東北の机(同上但無針)御所自り箏一張を申下し東北西北等の机上の北妻に置く(延喜十五年の例用和琴)箏裏書に云立柱三樣あり常に半呂半律を用ゆ秋の調子也黒漆燈臺九本を件の机四方四角の中央に立つ(加打敷謂之九枝燈)内藏寮御燈明を供す(用土器)件の中央の燈明に兩説あり或は北に向ふ或は御前に向ふ内侍所の粉五合を召て机の上及筵の上に散す御侍子を庭中に立つ(或無之)二星の會合を覽に爲す也(令

殿上(侍臣ヲ結番)之を窺ふ藏人御挿鞋を取て伺候す座を河竹の臺の東に鋪雜色以下伺候の座を爲す(式可候南廊壁下云々)或は御遊御作文等の事あり事了りて祿を給ふ曉更に及び之を撤す事了て格子を下す(雖達明猶下之亦上云々)諒闇の時猶祭る(天曆八)内裏穢の時猶祭る(應和二)雨濕の時仁壽殿の西の庇の下に設く行事の藏人終夜束帶監臨小板敷に候す雜色以下亦終夜遞に之を撿知す束帶さあり以て禁裏御祝儀の模樣を窺ふに足るべし此日に麵類を食するは如何にと云ふに素麵は織絲を象りて織女神を祭り麵は耕鋤を象りて牽牛神を祭るを意味す

るものなりとか云ふ又一説には高辛氏の女子の死せしは此日にして其靈鬼神となりて人に瘧を病ましむ未だ死せざるの日麥餅を好めるを以て死後索餅を以てこれを祭れり故に後人索餅を食すれは瘧疾の患ひなしとも傳ふ扨て此織女とは天帝の娘にして俗に太奈波太豆女と稱へ別に乞巧奠、秋さり姫、薫姫、さゝかに姫、百子姫、糸織姫、朝貌姫、梶の葉姫、ともし妻などの異名ありて機織の名人なりしが毎日裝飾を搆はず機業に餘念なかりしかば父其獨居を憐み天川の西に居る牽牛の處へ嫁入せしめけるに忽ち女工を廢して遊惰にふけりしかば父大に之

を怒り直に呼返して年に一度只七月七日の夜にのみ會ふことを許したりとか然してたなとは空の謂ひにしてたな雲と云ふも天の曇れるを云ふものにて即ち空の機織る姫と云ふ心なるべし家屋の棚も空にあるもの故に俗にたなといふ七夕を棚機と云ふも蓋し其意に外ならずかし此織女と牽牛とは天河を隔てゝ西と東に居る故に二つの星が相逢ふには必ず此河を渡らざるべからず其れ故に若し雨ふりて増水するときには遂に渡るべからざるに至るを以て鵲と云ふ鳥が飛び來りて銀河に鳥の橋を造りて渡らしむるとなり彼百人一首の歌に「かさ

くぎの渡せる橋に置く霜のしろきを見れば夜ぞふけにけり」とあるも此七夕の渡る橋より云ひ出せしものなりとか此の如きの説は誠に可笑しき事の限りにして理學上などには固より釣り合はぬ話なれども寔に興味ある話と云べし天河は雲漢天漢銀河星河左界靈源銀潢銀漢などの異名ありて皆あまのがはと訓せり去るにても其初めは何れの頃より行はれしものにや確とは知かたけれども公事根源に記する所によれば天平勝寶七年孝謙天皇の御宇既に行はれたるが如くに見ゆ又正徳の印本伊呂波芝居に七夕踊の事を記せるを見るに「昔は人の

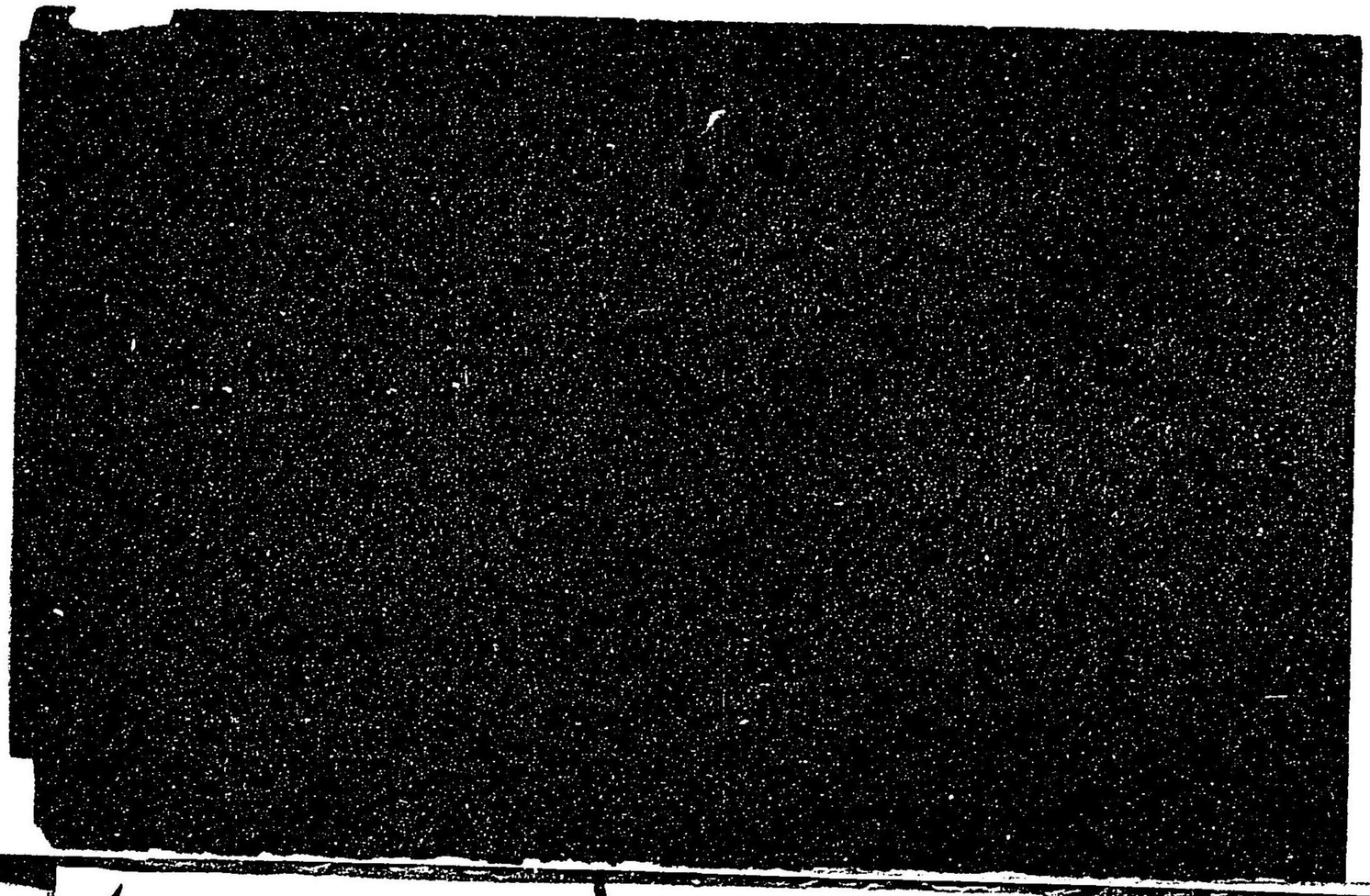
心も公道にて十八九まで前うしろ見ると云ふことなく男のはてのやうにそだつ娘七夕のかけ踊に母親の愛だてなく緞子のはちまき尖綾綸子の櫛髪はあたまの辻にたてかけ繻珍の着物に緋りんずの下着をほのめかせ金の太鼓に塗ぶち鶴亀かいたる日傘に布袋かいたる薄絵の團扇乳母ばかりは古今かはらず此子を笠にきて横ひらたい尻に金入の帯しどけなく地黒に羽團扇の大模様の縫入のかたびら十四五なる小女郎に彼袋ひきみのさ已れが身をあふがきて行のみならず下女に檜破籠やうの物もたせて小町踊りの門にいたれば必ず内へはひて

り我もの貌に人の娘をもてなす事にして我主の子はそこ〳〵に喰たも喰ぬも知ることなく暮れば酒きげんにゆるき歸る」とありて元祿より寶永年間に掛けて盛んに流行したるやうなれども享保の季頃より既に廢れて今は其名だに知るものなきに至れり去れど思ふに盆踊てふものは今に行はれて子供らの樂しみものとなり居れば或は此らと同じものにてもあらんか還魂紙料に「七夕踊とて別にあるにあらず小女の人情に盆をまちかねて七夕よりをどる故の名なるべし」とあるを見ても知るべし斯く樣々の儀式も多くあれども今の文明の代にあり

ては強ちに賞揚すべき程の事もあらず只心して務めたきは歌詠みの事にぞあるむかしは七葉の色紙に星合の歌を認めて明日の飾りものにせんと机に向ひ一夜づくりの手向けの歌工夫のつかで夜を明かす族も多かりしと聞く一躰歌てふものは人の心の修行にて火の中水の底にても志さへあれば進むべきは此道なり先づ忠孝の道を初めとし有爲轉變の世の樣を辨まへ人の心を思ひやり花に和らぎ月を愛し千里の外の名所古跡を居ながらにして樂み門を出ずして世の中の有樣を見るは歌の德なり心あらん人々は常につとめて此らのたしなみ

あらまほしきものにこそ取り分け婦女子に於ては一層注意して心掛たきものなりさす

明治二十七年七月四日印刷
明治二十七年七月七日發行

定價金三錢

編輯兼發行者　村木經策　盛岡市八日町四十番戸
印刷者　佐久間衡治　京橋區西紺屋町廿六七番地
發行所　群書城　日本橋區下槇町九番地
印刷所　株式會社秀英舍　京橋區西紺屋町廿六七番地
大賣捌所　文館　日本橋區本町三丁目八番地